

新撰
日本文法辞典

口語篇

文学博士 金田一京助 序
文学博士 折口信夫 序
文学士 浅野信 著

森北出版株式会社

日本圖書館協會選定
學校圖書館協會選定

文學博士 折口信夫序

文學博士 金田一京助序

相模女子大教授 淺野信著

新撰日本文法辭典

增補版

文語篇 B6判 四六〇頁
定價 三七〇円

文章篇 B6判 四二四頁
定價 三五〇円

昭和二十三年六月二十八日初版發行
昭和二十九年六月二十五日五版發行

增補版

新撰日本文法辭典 口語篇

定價 四八〇圓

著者 淺野 信

發行者 森北常雄

印刷者 鈴木芳太郎

發行所 森北出版株式會社

東京都千代田區神田小川町三ノ十

振替東京 三四七五七番
電話東京 〇三六・五六番

製本・有限會社 石毛製本所

若き世代の爲の書

浅野信君は、人に、その健康を縣念させながら、今年は早、二冊、若い學徒のための本を書きあげた。何年にも、たゞの一冊も、書物らしい纏つたものを書かぬ私などは、ひそかに鼻しろまずには、ゐられぬ譯である。

文法辭典の文語篇の出來た時から、待ち望んだ口語の文法辭典が、春をそこに控へて、世に出ようとしてゐる。

國語・國文學の學徒は、つねに近代生活を古代精神の中において活することに努め、勤しき功勞を青史の上にのこすことを心がけて居る。かう言ふ覺悟は、此本の部門にも、自ら泌み出でゐることであらう。

2/100/12

さうして、もつと手近な實地の業績としては、どうか、いんぎにまみれ、墨だらけになつて、さゝけて居る若い魂を、幾らかでもなごやかにし、文章ものにほひやかにものする、美しいやまとごころをさそひ立てゝくれますやうに、と祈るのである。

浅野君は、なか／＼見識を持つて居て、頑にすら見える所がある。たとへば、この巻は、口語篇だけれども、今日行はれてゐる小説・戯曲文學や、日々の家常茶飯事の用語などは、わりにとりあげてゐぬ様に見える點なども、其一つである。次の世代の標準文體と言ふべき様式を、念頭に浮べることの激しさから、自らその範圍に、制限が出来る譯なのである。つまり、國語指導者としての性癖の姿と見るべきものであらう。

だが、之を見る人々の爲には、文語と口語との間を行く、日常語の標準についても、反省を深める絲口になるだらうし、第一、在來の所謂文語文にとり替るはずの、清潔な口語文の爲の地形爲事として、十分な役目を果すことだらうと思ふ。

私は、前にも書いたやうなことを、もう一度書き添へておく。此本は、講堂の扉をあける前の焦眉の急を處置する爲に、繕くべきものではない。放課や、休日の靜かな憩ひの間

に、祖先から傳へた、靈ある語を、兒孫に傳へる、人間の營みの準備として讀まれて、行くやうに、どうかなくてはしいものである。

おと子の朔日

折口 信夫

序

日本文法辭典、口語篇が出来て、その序文を徴して來た。前に、文語篇に書いたものだからその繼續で、辭退することが許されない。

著者の淺野君は、既に文語篇の序文で紹介したやうに、國學院大學、國漢科出身の逸材で（編集者の蒲池君とは同窓同期同學の間柄であつた）本書の前に、卒業直後から、已に數々の好著を世に送つて、國語學界には周知の名である。

本書は、校正刷の一部を見せて貰つただけで、全部に目を通したわけではないが、苦心のあとがよくわかる。たゞ口語は文語より複雑多岐で、成書も少いから、資料の上にも、説明の上にも、獨自のもの、新規のものが多く、従つて又、中には往々にして所見を異にすることなどもある。かういふ仕事は、誰がやつたとて、完璧を期することは出来ないから、また止むを得まい。但し、範圍は、出来るだけ廣潤に、資料はなるべく豊富に、とい

ふ親切さから、例へば、口語篇と云つても候文の資料まで收めてあつたり、助詞と云つても所謂助詞のみならず、接辭も出れば、形式語化した名詞も出て來るといふ至極重寶な出來である。が、また文法上の術語の誤解を生じないやうに、どこかに區別を明記すべきでは無かたらうか。大分急いださうであるから、再版には所々その少過と共に訂正され得ることと思ふ。

ともあれ、堂々七百ページ、この種のものとしては全く最初のものである。著者の勞を多とせざるを得ない。

お互に忙しいので、暫く逢はないと思ふ間に一年二年がすぐに經つ。逢へば必ず新著を以て見えるといふ逢ひ方である。後生畏るべしといふのは、まことに淺野君のやうな人を云ふのであらう。大成を祈つて止まない。

十一月三十日

金田 一 京 助 識

自序

金田一先生・折口先生から、前著「文語篇」に次いで、茲に重ねて序文としての御言葉を戴き、私生涯の榮譽と、まことに感謝感激に堪へないところである。

思へば、今私は本書をおぼやけにすることによつて、日本文法辭典「文語篇」「口語篇」の二書を世におくことを得たのであるが、凡そ我が國に辭典と名づけられたものの世に出てから――特に明治以降――助詞・助動詞を十分に併せ編んだものを絶えて見ないのである。吾が國語の特質は、いはば助詞・助動詞にあるといつてよい。然るに、この最も重要なべき語類を脱落せしめてゐるといふことは、何といつても無自覺であり不見識であつたと言はざるを得ない。異國人は勿論のこと吾が國人でさへ古典は勿論、現代語さへもその精確なる理解と把握とが出来ないのではないか。本書はやがて編まるべき完璧なる「日本文法辭典」の前ぶれとしての、いまだ至らざるものではあるが、この點從來の空虚を補ふに幾分の貢獻するところがあるであらうと氣を負ふものである。

それについて更に思ふことは、一般口語についての考察と集成とである。一般口語は、別にいへば「ヨノナカノコトバ」(學術的に(つての俗語))であるが、この立場からのもされたものも、或は之を擧げ得ないのではないかと危まれる。世の多くは漢語中心か、さなくば名詞・動詞中心の辭書でしかなかった。而も一般口語に極めて多い象徴語等に至つては、彼の大言海すら遺憾の點がなかつたとは云はれない。のみならず、現代語に於ての助詞・助動詞のそれに至つては、現行口語文典の――僅かに一二を除いては――いかなるものを以てしても、その相當の數量を逸脱せしめざるを得ない状態にある。本書は現行文典に取り上げられない多くの語類を、現實を踏みつゝ登載し、その遺憾なきを期したのであつたが、こゝに及んで、うたた痛切に如上の感慨なきを得なかつたのである。かういふ時、私は微溫的ながら、前人に既にその功を思つて手を染められた文士のあつたことに感謝せざるを得ない。

一は「和英辭書」(TAKENOBUS JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY)の著者たる武信教授であり、他の一は「俗語辭海」の編者松平氏であつた。前者は從來の國語辭書を不満として助詞の精細を究めようとし、後者は俗語一般について記述したものであつた。本書の成るに當つても、これら二書に勇と力とをそへられたことを記して感謝の意をさぐげなければならぬ。

私自身からいへば、本書は案外に早く出来たといへるが、世人から見れば遅かつたと見えるかも知れぬ。無慮二〇〇枚を越える原稿を、私の手一つにしたためととのへるのにしては、全く豫想外に早かつたといつていいのである。それには、私が身を投じて悔しからぬ道ではあり、且はにくき蒲池君のしうちによるものである。蒲池君はにくい男である。私にこんなに早く事功を運ばせたのである。氣儘な私如きは、普通ならば今後どの位かゝるか知れぬのである。同君の心情にくやしいながら感謝の念を捧げざるを得ない。

―思へば私は、ほんとに仕合せだと思ふ。好きな勉強に没頭出来て、さうしてこのやうに先生方からは有難いお言葉を戴くことが出来て、私はもうこの外に何も嬉しいことはないのである。折口先生・金田一先生には重ねて厚く御禮申上げると共に、併せては日頃多大の御指導を戴いてゐる松尾先生・今泉先生に心から感謝の意を捧げるものである。』

「註」 蒲池君は昭和四年國學院大學卒業の同期生で、本書の上梓に非常な努力をしてくれた人である。ここに改めて同君に感謝したい。

十一月二十二日

淺野 信 識

凡例

一、本書は著者の品詞観によつて、口語として行はれる言語を、普く品詞別に収録したものである。但、未だ十分に固定を見ない言語や、特殊用語・特殊術語はこれを取らず、又その品詞分けにしても、従來の九品詞説の名目を立てておく以上、その甚だしさを押し通すことが許されず、よつて従來の品詞論の不合理の甚だしいものだけを處理して、その歸趣を明瞭にしておくに止めた。その品詞内容については卷末の「品詞概説」を参照されたい。

一、本書は特に左の事項に注意して、その遺憾なきを期した。

語感的考察 文法的考察 國語史的考察
音韻的考察 詩的考察

一、本書には名詞・形容詞・助詞・助動詞等に於て遙かにその内容を擴充して、従來「語」があつてもそれを説かないが如き偏狹を捨てた。名詞に金田一博士のいはゆる準名詞を

入れては來の體系を明快ならしめ、又形容詞の中に副體詞の類を入れて一まづその歸趨を明かにしておき（本文中「特」とあるはそれ）、名詞等より來る幾多の助詞を増加し、苟も文章法的有機關係から離れて一語として摘出され、而もそれが完全なる意をとゞのへ得ないものは之をすべて助詞（術語として不満足ではあるが）とし、更に活用ある助詞は、大局から見てひろく助動詞として收録した。尙いはゆる形容動詞は殆んど二語に分離して二品詞に扱つた。

一、助動詞の中、從來その活用が二行に亘りながら、一行の活用中に説いた否定の助動詞や指定の助動詞等を二種として

(イ)	○	ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね↓	○	ず	○	○	○
						○	○	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね
(ロ)	だ	だ(つ)	だ	な	なら↓	○	だ	たり(つ)	だ	○
						○	○	○	○	なら

の如く説いたが、類語もこれに倣つた。尙文語助動詞の殘影として現に吾人に生きてゐる語類も、その活用形の存するものだけ掲げた。

一、形容詞の活用形の中には、實際上その活用の存しないものもいくつかある。それらは

多く連用形と連體形だけが存するものであるが、それらも實際の調査によつて知り、或程度本書中にもことわつた。

二、形容詞・動詞は、その終止形が實際には餘り用ゐられない。それは口語が餘韻・餘情をたつとぶところから、下に種々の相を添へる語を伴ふのによるものである。よつて活用表にあるものが、凡て實際に存するとは限らない。その點のことも遺憾なきを期した。

一、本書收録の助詞・助動詞は、その調査考究の結果、從來の語數に相當の量を加へ、又質的にも幾多加へるところがあつた。まづ日常普通に觸れる語類は殆んど漏らすところがないと信ずる。但、「やうだ」を助動詞とするが如き不定見は之を排除した。

二、口語には語形は單一でも、その使用法によつて實に多くの詩語・象徵語を存在せしめる。これは形容詞と動詞とに多いのであるが、その點十分意を用ゐて遺憾なきを期した。曾て經濟的に心を用ゐるさまの意の「細かい」が、殆んどの辭書に記載されてゐなかつたといふことは、餘りにも有名である。

一、本書引用の例文は、新聞・雜誌・教科書等を始め日常の談話から取つた。又著者の作

成にかゝるものもある。

一、本書は能ふ限り現代語に接し、殆んど當面の語類としては漏らすところなく之を考察して、然る後に著者の品詞觀によつて編んだもので、その點、予め用意した範疇に語類をあてはめたものではない。事實を先とし、而る後の體系によつたものである。

一、漢語も能ふ限り收録することにとめたが、いづれかといへばさう多くはとらず、或程度に止めた。普通漢和辭典に説かない「揚棄する」なども取らない代り、漢和辭典にしか存しない語類も之を收めぬことにした。

一、本書所收の一々の語の假名遣は原語通りにしたが、その語原が不明やら未詳の爲、又は當字のために不明瞭なものは、便宜上二通り、乃至三通りの掲げ方をしておいた。

一、一語の如くにして二語以上の語として存し、而も人口に熟した特殊語類は一まとめにして「句」として一番最後に收載した。但、既に「情ない」等純然たる一語形をなすものは、夫々その語類の部に收録した。

一、同形の語でも、現在の品詞觀では二種乃至三種にわたつて説かなければならぬものもあるが、本書はその著しいものだけに止めて、あとは著者の品詞觀によつて一品詞一別

とした。

一、本書を成すに當つては、出來得る限り手をつくし、思ひをひそめて遺憾なきを期したが、尙思はざる誤謬脱漏があらうかと思ふ。この點はひろく天下の人士の御示教を仰ぐのみである。尙終りに種々多年に亘つて参考とした「大海言」を始めて多くの書籍の著者及び身邊誘導の人士に感謝の意を捧げる。

一、本書について同名の辭典「文章篇」を刊行する。」

十一月二十二日

淺 野 信

好評に輝く森北の学習書

早田保實著	完全解析 I	B 6 630頁 320円 予50円
同	完全解析 II	B 6 630頁 予320円 予50円
鍋島信太郎監修	解析 I 完全問題集	B 6 144頁 70円 予16円
同	解析 II 完全問題集	B 6 190頁 90円 予16円
同	幾何完全問題集	B 6 200頁 予90円 予16円
慶応義塾高校 内数学部会編	実力養成 解析 I 問題集	B 6 160頁 70円 予24円
同	実力養成 解析 II 問題集	B 6 200頁 予90円 予24円
同	実力養成 幾何問題集	B 6 160頁 予70円 予24円
森本久次郎共編 浦牛原初蔵	教科準拠 数 表	A 5 48頁 60円 予16円
寺西武夫監修 立野忠雄他著	英文解釈完全問題集	B 6 130頁 80円 予16円
同	英文法 完全問題集	B 6 150頁 90円 予16円
武田祐吉著	日本文学史要説 (学生版)	A 5 210頁 170円 予24円
福永恭助共著 岩倉具実	口語辞典 (話し言葉と 引く辞典)	B 6 950頁 800円 予50円
日本歴史編 教育研究会	図説日本歴史年表	A 5 97頁 100円 予16円
世界歴史編 教育研究会	図説世界歴史年表	A 5 50頁 予80円 予16円
宇野武雄監修 古川 潔	商業 数 表	A 5 72頁 70円 予16円

珠算教育振興会編 新珠算能力検定試験標準問題集

1 級70円, 2 級60円, 3 級50円, 4・5級各45円, 6 級40円, 7・8級各35円,
〔伝票〕1・2・3級各35円

珠算教育振興会編 珠算実務検定試験標準問題集

1 級70円, 2 級60円, 3・4級各50円, 5・6級各40円 〔伝票〕3 級30円

文學博士 武田祐吉 關

文學士 江波 熙 著

例文
通釋
新撰古語辭典

B6 判 豪華上製 六〇〇頁
定價 三〇〇圓 二五〇圓

圖書協會推薦圖書

本書は名實ともに吾國に、於ける唯一の古典研究の辭書として、又新制
高校、新制大學の國語科の學習の最良の指針として、好評を博し、すで
に三十數判を重ね、現下益々その重要性を發揮致して居ります。本書は
特に學校、圖書館は勿論のこと學習の机上に必備の書として推薦されて
居ります。